
バカと I S とガンナーと召喚獣

直井刹那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとISとガンナーと召喚獣

【NZコード】

N5267Y

【作者名】

直井刹那

【あらすじ】

この小説は『バカとテストと召喚獣』の一次創作です。

オリ主が幼馴染の明久や

Fクラスメンバーの秀吉、雄二、ムツリーニ等や

Aクラスから翔子や優子、愛子たちのメンバーと

ISから一夏や篠、シャルロット、鈴、セシリ亞、ラウラたち

IS操縦者も加入して楽しく可笑しく毎日を過ごしていく物語です。

明久×瑞樹・明久×美波じやなきやダメだ、

という人はバックしてください。

そしてあまり姫路と島田の出番が少ないかもしません。
皆さんの感想お待ちしていますm(_ _)m

前置き

この小説は『バカとテストと召喚獣』の二次創作です。
オリ主が幼馴染の明久やFクラスメンバーの秀吉、雄一、ムツリー
二等や

Aクラスから翔子や優子、愛子たちのメンバーと
ISから一夏や篠、シャルロット、鈴、セシリア、ラウラたちIS
操縦者も加入して

楽しく可笑しく毎日を過ごしていく物語です。

明久×瑞樹・明久×美波じやなきやダメだ、という人はバックして
ください。

そしてあまり姫路と島田の出番が少ないかもしません。
皆さんの感想お待ちしています m(—_—)m

設定

設定・変更点

- ・文月学園は世界に1校しかない科学とオカルトが融合した学園。
- ・オリ主が明久たちバカテスマンバー や I.S メンバーと
学園生活を面白おかしく過ごしていきます
- ・明久はもちろんの事、観察処分者です。
- ・I.S のメンバーは召喚獣が I.S の装備になっています。
- ・明久は姫路に恋心を抱いていない。
- ・明久は健康的な食生活をしている。

また書いている通りに変更する場合があります。
それでも良い方は呼んで頂けると嬉しいです

「召喚戦争のルール」

- 1、原則としてクラス対抗戦とする。各科目担当教師の立会いにより
試験召喚システムが起動し召喚が可能となる。
なお、総合科目勝負は学年主任の立会いのもとでのみ可能。
2年学年主任：高橋洋子
- 西村 宗一に関しては全教科、総合科目での勝負の立会いを
可能とする

2、召喚獣は各人1体のみ所有。

この召喚獣は該当科目において最も近い時期に受けたテストの点数に比例した力を持つ。

総合科目については各教科最新の点数の和がこれにあたる。

3、召喚獣が消耗するとその割合に応じて点数も減算され、戦死に至ると0点となり、

その戦争を行っている間は補習室にて補習を受講する義務を負う。

4、召喚獣はとどめを刺されて戦死しない限りは、

テストを受けなおして点数を補充することで何度も回復可能である。

5、相手が召喚獣を呼び出したにもかかわらず召喚を行わなかつた場合は

戦闘放棄とみなし、戦死者同様に補習室にて戦争終了まで補習を受ける。

6、召喚可能範囲は、担当教師の半径10m程度（個人差あり）。

7、戦闘は召喚獣同士で行うこと。

召喚者自身の戦闘行為は反則行為として処罰の対象となる。

8、戦争の勝敗は、クラス代表の敗北をもつてのみ決定される。

この勝敗に対し、教師が認めた勝負である限り、経緯や手段は不問とする。

あくまでもテストの点数を用いた『戦争』であるといふ点を常に意識すること。

9、クラス間同士での同盟など自由で戦争も有。

例) 元がFクラスVS Bクラスであつて

途中でBクラスがCクラスに同盟組んだ場合、

FクラスVS Bクラス&Cクラスが可能となる。

ただし、この場合もしBクラスの代表が討たれた場合Cクラスも負けとなる。

よつてFクラスはB又はCクラス好きなほうの設備を手に入れることができ、

B・CクラスはFクラス設備となる。

（試験科目について）

【科目】

- ・現代国語 ·数学 ·保健体育
- ・古典 ·化学 ·英語
- ・世界史 ·物理 ·現代社会
- ・日本史

以上、計10科目に設定しています。

総合科目は上記の全ての点数の和とし、

召喚獣の腕輪は各教科400点以上の時に装備される。

総合科目では4000点の時装備される。

各クラスの総合科目の点数

・ Fクラス	1000点以下
・ Eクラス	1000～1300点
・ Dクラス	1300～1600点
・ Cクラス	1600～1900点
・ Bクラス	1900～2200点
・ Aクラス	2200点以上

こんな感じに考えてます。

ただし、A～Eクラスは定員50名となつてるので
Eクラス並の点数でもFクラスになる可能性がある

設定（後書き）

調子に乗って投稿しました。

今回は長続きできるよう頑張りたいと思います。応援よろしくお願
いします。

オリキヤラ紹介

風間拓斗 かざまたくと

- ・身長：178cm
- ・誕生日：7月7日
- ・一人称：俺
- ・あだ名：タクト、拓斗
- ・趣味：ゲームや漫画（軽いオタク） 明久の影響
- ・好きなこと（もの）：友達（特に明久）、食べ物（特にお菓子）、明久の料理
- ・嫌いなこと（もの）：友達を傷つけるヤツ、姫路の料理トラウマ
- 明久をバカにするヤツ
- ・特技：射撃

特筆事項

- ・一応本作の主人公。
- ・見た目はスタードライバーのツナシタクトで髪の色が黒である。
- ・明久や姫路とは小学校からの付き合い。
- ・小学生の頃はいじめられっこだったが明久に助けられたことがある。
- ・それ以降明久と仲良くなつた。その時今度は明久を助けたいと思い体を鍛えている。
- ・また、姫路の殺人料理の1番最初の被害者。
- ・たまたま小学校の調理実習の時同じ班だったので食べた事がある。
- ・家族構成は父親・母親・祖父・兄がいる。
- ・父は探検家で現在は母と共に海外にて冒険中。
- ・また祖父は世界で知らないものはいないといわれる

れる。

兄は祖父のところで働いている。次期社長といわれている。
大企業の社長である。なのでよくお小遣いやお菓子が届けられる。

- ・家は明久の家（部屋）の隣の家。
- ・本人が料理できないので明久と一緒に食事をしている。
- ・体を鍛えたので雄二以上武力をもつ。
- ・また銃の扱いがピカ一で常に改造工アガソを2丁仕込んでいる。

改造工アガソの威力は普通の工アガソと比べると威力が全然違う。

成績も翔子には少し劣るが学年次席の成績をもち文武両道である。

- ・時々まじめだが時々フリー・ダムな男
- ・鞄の中にはお菓子がたくさん入っている。休み時間などによく食べている。

・空腹状態が長く続きと暴走する事がある。

・文月学園では1年の時は明久たちとは違うクラスで翔子や優子と同じクラスだった。

・観察処分者である。

振り分け試験の時明久が倒れた姫路をつれて退出した時に、教師の1人が明久の事をバカにしたので仕込んでいた工アガソでその教師をブツ飛ばしたから。

他にも理由があり、時々早退して

アニフェスやケーキバイキングなどに行つたことがあるため。

ンで

< 召喚獣 >

防具：ガンダム00のケルディムガンダムGNHW/R。

武器
・スナイパーライフル

銃身を折りたたむことで、

取り回しと連射性能に優れた3連バルカンモード

に変形する。

不使用時は右肩に折りたたまれた状態でマウントされる。

- ・ビームピストル

左右の背部に1挺ずつ懸架されたビームピストル。接近戦用にコーティングを施した銃剣が設置されている。

ヒートティングにより敵の攻撃を受け止めることが可能である。

グリップを垂直に立てて手斧のように使いこなすことができる。

- ・ミサイルポッド

腰部フロントマーマーに内蔵されたミサイルポッド。

2連装のポッドを左右各2基ずつの4基、合計8発のミサイルを内蔵している。

- ・シールドビット

遠隔操作が可能なシールド。

シールドを自在に分散、密集させることで、多方向からの攻撃に対応できる。

左肩に2基、両膝に2基、背中に7基の計11基が装備されている。

各ビットにビーム砲が内蔵されており、

4基を格子状に配置した「アサルトモード」では、より強力なビームを発射することができます。

- ・ライフルビット

シールドビットよりも大型の遠隔誘導兵器。

右肩に2基、太陽炉に4基の計6基を装備する。

離を持ち、

1基でスナイパーライフルと同等の威力と射的距

右肩の2基は固定砲塔としても機能する。

シールドビットと同様に、盾としても使用できる。

召喚時に任意で装着可能。

腕輪の能力

『トランザム』

- ・召喚獣の能力が30分間大幅にUPする。
30分経過すると効果が自動的にきれ、
能力が10分間元の1／2落ちる（点数も）
- ・使用時は召喚獣の体や装備の色が赤く染まる。

プロローグ ～振り分け試験当日～

『試験召喚システム』――

科学とオカルトの偶然により完成されたそれは
テストの点数に応じた『召喚獣』を呼び出し戦うことのできる
最先端システムである。これは世界でもこの学園でしかまだ確認で
きていない。

その召喚獣を用いたクラス単位の戦争――

それが『試召戦争』――試験召喚戦争である。

試験によりクラスがAクラス～Fクラスにまで振り分けられる。
振り分け基準は勿論テストの点数である。

頭が良ければAクラス、そこからB・C・D・Eと下がっていき、
最も頭が悪ければFクラスとなる。

更にこのシステムが運営されている、

この『文月学園』では、テストの上限がなく、クラス毎に設備が変
わる。

Aクラスでは、ノートパソコン、個人用アロン、冷蔵庫、リクライ
ニングシートなどの
設備が整つており、全て学園側から支給される。
一方Fクラスはといふと、机は卓袱台、椅子は座布団、チョークす

ら用意されていなく、

蜘蛛の巣がはつていて、カビ臭い。

しかしそんな設備も『試験召喚戦争』により変えることができる。

下位のクラスは上位のクラスに勝てば施設を交換できる。
逆に負けた場合は施設が一段階悪くなる。

今日はそんな学園のクラス分けテストの日……
俺は試験を受けていた

教師「それではクラス振り分け試験始め！！」

教師の合図で全員がテストをめぐる。

明久「（難しいと噂の試験だけこの程度なら10問に3問程度なら解ける！）」

ここに、試験に取り組む少年がいた。彼は吉井明久という。
明久は俺と小学校からの親友である。

『ガタンッ！！』

突然明久の近くで誰かが倒れた。

明久「ひ、姫路さん！？」

明久は席を立ち、姫路に駆け寄る。

教師A「吉井！..試験中だぞ、席につけッ！..」

明久「でも、姫路さんが…」

教師A「姫路、..体調が悪いなら保健室に行くか？
ただし試験中の退室は『無得点』扱いとなるがそれでいい
かね？」

明久「ちよつ！..具合が悪くて退席するだけでは酷いじゃない
ですかっ！..」

姫路「……た、退席します…」

教師A「では姫路、お前は無得点だ」

姫路「……はい…」

明久の必死の抗議も聞き入れてもらえず、結局姫路は無得点扱いに。
ちよつと理不尽すぎやしないか？こんな事で無得点なんて。

姫路「失礼……しま……あ…..」

明久「つ！姫路さんつ！」

フラフラしながら教室を出ようとする姫路さんがバランスを崩し、
咄嗟に明久が支える。

明久「姫路さん掴まつて。僕が保健室まで付き添うから

姫路「よ…吉井くん…、でも…」

教師A「吉井、何をしている…早く席に戻れ…！」

明久「こんな状態の姫路さんを放つておく事なんて出来ません！」

教師A「貴様も無得点扱いにするぞ！？」

明久「！」自由に。姫路さん、行こ！」

教師A「待て、吉井！…！」

『ピシヤツ！』

先生の言葉を氣にも止めずに、明久は姫路さんを連れて教室から出ていった。

……そうだよな、明久はそんなヤツだからな。

自分が大事だけどそれ以上に周りの人を大事にする人…。

そんな明久だから、俺はアイツの親友でいられるんだ……。

（さて、そしたら俺はどうするかなあ…）

正直クラスなんてどこでもいいしな。

明久と同じクラスであればどこでもいいし。

いつそ名前無記入で出すかなかなあ…。

と、そんな事を考えていたら…。

教師A「チツ、クズが……」

あ?

氣のせいだらうか。この教師、今小声で許しがたい言葉をほざいた様な……。

教師A「まつたく、バカの考える事はよくわからん」

。

ガタツ!

教師A「ん? 何だ風間、お前も無得点にされたいのか!?!?」

何か言つてゐみたいだけど全然聞こえない。

今、俺にはテストよりも大事な事しないといけないことがある。

何かつて?それは。

『ツカツカ』

教師A「な……、何だ!?!?」

「(一一四)」

力チャ

『バンツ！！』

教師A「ぐぼおつー？」

俺は懐から隠し持つていた改造工アガンを取り出し教師の腹をゼロ距離で撃つた。

その後教師の顔を1発殴り、

拓斗「すいません。気分悪いんで早退します」

悶絶してる教師と渋然としてる他の生徒に一瞥もくれず、俺は拳を振りながら教室から出ていった。

プロローグ ～始業式～

俺達が文月学園に入学してから2度目の春が訪れた。

校舎へと続く坂道の両脇には新入生を迎える為の桜が咲き誇つている。

別に花を愛でるほど雅な人間じゃないけど、その眺めには一瞬目を奪われる

はずだった

明久「遅刻だあ―――っ――！」

それは、俺達は初日の始業式から、いきなり遅刻しそうになつてゐるからだ。

何故こんな事になつたかといふと

拓斗「そろそろ時間だから明久を起こしてに行くか

俺、風間拓斗は吉井家とは昔から仲が良く食事は明久に作つてもらつてゐる。

ちなみに家は隣。

今日は文月学園2度目の始業式の日である。

拓斗「明久朝だぞー起きりお―――！――！」

明久がいつものように起こされたのが始まりだ。

始業式当日の今日の朝方までゲームをしていたらしく全然起きなく、やつと起きたと思ったら何故か昔の姉の制服を着ており、また着替えるという作業をしていて気づいたら時間がヤバいということだ。

拓斗「これというのも、お前が寝坊して間違って姉の制服なんか着るからだぞ！！」

明久「う、うめん。ゲームのキリがつくなくてさ」

拓斗「昨日あれほど言つたじゃないか！」

せめて始業式の日ぐらいは遅刻したくなかったのに

とこつわけで俺達は学園へと続く坂道を登つてゐる。

坂道を登りきると

西村「吉井、風間遅刻だぞ」

－－ドスのきいた声に呼び止められた。

明久「あ、鉄じ——西村先生、おはよっしゃります」

拓斗「鉄村先生おはよっしゃります！」

鉄人「吉井兄、今鉄人つて言わなかつたか？」

それと風間は鉄人と西村を混ぜただろ

明・拓「ははっ、氣のせいですよ」

鉄人「ん、 そうか? まあいい。」

あついいんだ。

鉄人「それよりお前ら普通に『おはよつゝぞこます』じゃないだろ」

明・拓「今日も肌が黒いですね」

鉄人「.....お前らは遅刻の謝罪よりも俺の肌の色の方が重要なのか?」

明・拓「そつちでしたか。すみません」

鉄人「まつたくお前らは.....まあいい。ほら、受け取れ」

鉄人が俺達に封筒を差し出してくる。

宛て名欄には大きく僕らの名前が書いてあった。

拓斗「あ、クラス分けの紙ですか。どーもです」

明久「僕、思つたんですけど、どうしてこんな面倒なやり方でクラス編成を

発表しているんですか?掲示板とかで大きく張り出しちゃえ
ばいいと

思つんですけど」

西村「普通はそうするだけだな。まあ、ウチは世界的にも注目されている

最先端システムを導入した試験校だからな。
この変わったやり方もその一環ってワケだ」

明久「ふーん。そういうもんですかね」

西村「今回の事は他の先生方から聞かせてもらつた。吉井」

明久「はい」

西村「俺個人の考え方としては、お前の行動を褒めてやりたい。出来ればもう一度チャンスを与えてやりたい。だがルールはルールだ」

明久「はい。大丈夫です、後悔してませんから」

西村「そうか…、ならいい」

明久は微塵も後悔していない。真っ直ぐな視線で鉄村先生にそう伝えた。
さすが明久だな。

西村「だが、問題はお前だ風間！」

拓斗「ええつ！？俺！？」

突然鉄村先生に呼ばれて我に帰る。俺が何をしたと？

西村「いくら大事な幼馴染みがバカにされたからといって、教師を殴り飛ばすとは何事か！！」

明久「ええつ！？タクトそんな事したの！？」

拓斗「何言つてるんですか！寧ろ2発で済ませた事を褒めてもらいたい位です！」

本当だつたら病院送りにしてやりたい位ですか！？」

西村「その2発で殴られた先生は病院送りになつたのだが？」

拓斗「あれおかしいな？手加減した気がするのに」

まああの時、頭に血が上つて手加減しなかつたからな……。

……スッキリした事は黙つておこう……。

明久「ハ雲だめだよ。怪我なんかさせちやん……」

西村「吉井の言つ通りだ。解つたら少しほ反省して」

明久「ばれない様にしないと」

ハ雲「そうだな。今度からはそつする」

西村「違うーとにかくー風間には今後、厳重な監視が必要だと
先日の職員会議で決定した」

そう言いながら鉄先生は懐からさつきとは別の封筒を取り出し、俺に差し出してきた。

西村「受け取れ、これがお前に对する罰だ」

拓斗「何ですかコレ？」

西村「見れば分かる」

封筒を上から破つて、中の紙を開いた。

明久「ちょ…、タクト…！？」

後ろから覗き込んでる明久が動搖してるみたいだけど、俺は意外とすんなり受け入れる事が出来た。
まあ予想はしてたし、当然といえば当然だしな。

風間拓斗

上記の者を文月学園指定『観察処分者』として認定する

。

こうしてボクたちの一年目の高校生活が、幕を開けた。

プロローグ ～自己紹介～

明久「……なんだろ?」このばかデカい教室は、
ここ本当に教室? 高級ホテルのロビーにしか見えないんだけど
ど」「

拓斗「個人エアコン、冷蔵庫、リクライニングシート、その他もう
もう豪華な品々…

本当に勉強する環境か?」こには

明久「… 教室の設備に色々と突っ込みたいけど、これ以上の遅刻は
マズイし、

僕達も教室に行こうよ!」

拓斗「ああ、そうだな」

そつとして僕らは F クラスに向かつ。

明久の言つ通り、その教室には 2・F と書かれたプレートが掛
かっていた。

明久「じゃ、僕から入るね

拓斗「了解」

ガラツ

明久「ごめんなさい少し遅れました」

雄二「早く座れ！！」のウジ虫やー！？」

拓斗「よつ雄二！今、何て言つた？撃つぞ！」

僕は雄二に向けてエアガンを構える。

雄二「な!? 拓斗かい、今のは言葉のアヤだ。

つてなんでお前がFクラスに？お前ならAクラス入り確実だ

ろうが

拓斗「まあ色々あつてな。

だけどAクラスより明久やお前らと一緒にいたほうがいいしな

雄二「お前らしいな」

と、その時。

福原「えーと、ちょっと通してもらひますかね？」

不意に背後から霸氣のない声が聞こえてきた。

そこには寝ぐせのついた髪にヨレヨレのシャツを貧相な体に着た、いかにも冴えない風体のオジサンが居た。

福原「それと席に着いてもらひますか？ HRを始めますので

拓斗「りょーかい」

明久「はい、わかりました

雄一「うーつす」

俺たちは人はそれ好きな席に向かう。
ちなみに俺は明久の隣で雄一の後ろの席だった。

福原「え〜、担任の福村慎です、よろしくお願ひします。」

教壇に立つた福村先生は自己紹介をし、
黒板に名前を書こうとしたがその手を止めた。理由はチョークがない
からである。

福原「皆さんに卓袱台と座布団は支給されますか?
不備があつたら申し出て下さい。」

明久「これで不備がないって言つ人に会つてみたいよ

拓斗「それは俺も同感だな」

それもそうだろう。机と椅子はなく、あるのは卓袱台と座布団。
さらに天井にはクモが巣を作り、畳は痛み、窓ガラスは所々テープ
が貼られている。

F「せんせー、俺の座布団綿がほとんど入っていません」

福原「我慢してください」

F「先生、俺の卓袱台の脚が折れています」

福原「木工ボンドが支給されますので自分で直してください」

F 「センセ、窓が割れてて風が寒いんですけど」

福原 「わかりました。後でビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきましょ」

それに関する苦情が次々と生徒から寄せられるが先生は我慢してくださいか、自分で何とかしてくださいぐらいしか言わない。

福原 「では自己紹介でも始めましょうか。廊下側の人からお願ひします。」

スクツ

秀吉 「木下秀吉じゃ。演劇部に所属してある。」

そのまるで男とは思えない容姿にFクラスの面子は思わず見とれた。だけど秀吉は男なんだがな……次はその前の少年が立つた。

康太 「…………土屋康太」

次に自己紹介したのは小柄な体の少年ー土屋康太だ。

彼はムツソリーー」というあだ名を持っているが本名よりもそっちの方が知名度が高い。

秀吉と康太とは去年からの付き合いだ。

島田 「島田美波です。海外育ちで日本語は会話できますけど読み書きが苦手です。

あ、でも、英語も苦手です。趣味は

「

ポニー・テールで勝ち気な印象を「える少女」島田美波は一回区切り、

島田「吉井明久を殴る事です。」

島田が明久に向かつて手を振つてゐる。

おい島田、明久が震えているぞ。

大丈夫だ明久。もし手を出そるものなら俺が処理する。

次々に自己紹介がすんでいき次は明久の番になつた。

明久「一コホン。えーっと吉井明久です。気軽にダーリンと呼んで
くださいね」

次の瞬間、

F「「「ダアア――リイイーン――。」」

野太い男の大合唱。

明久「…………失礼、忘れてください。
とにかくよろしくお願ひします」

拓斗「…………明久」

明久「ごめん。まさかあんな反応するとは思わなかつたんだよ」

おつ、次は僕の番だな。

拓斗「風間拓斗だ。これからよろしく頼む。」

特技は銃を扱う事で、狙い撃ちや早撃ちが得意だ。趣味はゲームや漫画。

そしてお菓子が大好きだ。だから何かくれると嬉しい。
あつそうだ。先に言っておくが明久に手を出したら

ガシャ

俺は隠し持っていたエアガンを取り出し構えると

拓斗「 生きて返さないから、そのところよく覚えておいでくれ」

F「…………りょ、了解です」「」「」

Fクラスの皆はエアガンを見て大人しくなった。

再び自己紹介が続いていく。

一夏「織村一夏です。よろしくお願ひします」

へ～あんなヤツも俺達のクラスなんだ。
どんな自己紹介するんだ。

一夏「以上です」

ガクッ

それだけか！

少し期待していたのに・・・・・

周りを見てみるとあまり興味がないようだった。俺だけか？

篇「篠ノ之簣だ。よろしく頼む」

また名前だけの自己紹介か。
まあ皆それだけみたいだからいいのか?

プロローグ ～これがFクラス～

自己紹介が進んで言いつてると

? 「あの、遅れて、すいま、せん。」

F 「 え？」

全員がその声の方に目を向けるとそこには1人の女子生徒がいた。

福原「ちょうど好かつたです。今自己紹介をしているところなので、

姫路さんもお願ひします」

姫路「は、はい！　あの、姫路瑞希と言います。よろしくお願ひします！」

途中から尻すぼみな自己紹介を終えて、小柄な体を縮み込ませた。

F 「はいっ、質問です！」

姫路「あ、はいっ。なんですか？」

F 「何でここにいるんですか？」

傍から見れば失礼な質問だが、ほぼ全員がそう思っていた事だつた。彼女は容姿も人目を引く程で、1年次のテストでは1ケタの順位に必ず名を連ねている学力の持ち主でもある。

当然こんな場所に来るべき人間ではなく、

最高設備であるAクラスに入っている物と誰もが思う事。

だからこそ、この質問はある意味必然なものだつた。

姫路「そ、その……振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました……」

AからFまでのクラス分けは、学年末に行われる振り分け試験で決まる。

その試験は難しいという評判だが、途中退席は〇点扱いにされるという厳しいテストである。

F「そういえば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに」

F「ああ、化学だろ？ あれは難しかったな」

姫路の言い分を聞いて、1人がそう言いだした。

それを皮切りにざわつき始め、次の言い訳が飛び交う。

F「俺は弟が事故に遭つたと聞いて、実力を出し切れなくて」

F「黙れ1人っ子」

F「前の番、彼女が寝かせてくれなくて」

F「今年一番の大嘘をありがと」

その様子を見て、俺は一言。

拓斗「……想像以上にバカが多いみたいだな」

それを聞いて、明久はうんうんと頷いた。

姫路「で、ではつ、今年一年よろしくお願ひしますー。」

姫路は逃げるよう^に、雄二の近くの空いてる席に着いた。
彼女は席に着くや否や、安堵の息をついて卓袱台に突っ伏してしま
う。

雄二「よう姫路、体調は大丈夫か?」

姫路「えーっと…、あなたは…」

雄二「坂本だ。坂本雄二。宜しく頼む」

姫路「あ、姫路です。宜しくお願いします。」

深々頭を下げる姫路。

「— ゆーべー」「からでも彼女の育ちの良さが伺えるといつものだ。

雄二「といひで姫路。体調の方はもう良いのか?」

明久「あ、それはぼくも気になる」

明久が気になり姫路に声をかけた

姫路「あ、明久君!？」

明久の顔を見て、瑞希が驚いた。

雄二「姫路、明久が不細工ですまん」

姫路「そつ、そんな事より、吉井君は全然不細工ではありませんよ？」

明久「え？」

姫路「目もパツチリしてるし、顔のラインも細くてきれいだし、その、むしろ……」

雄二「まあ確かに、悪くはないかもな。そういうえば、

俺の知人にも明久に興味がある奴が居た気がする」

雄二のその言葉で明久は嬉しそうに、瑞希は驚いて、俺はまさかと言った様な表情に。

明久「え？ それって？」

姫路「そつ、それって一体誰ですか！？」

明久の声を遮るかのように、瑞希が声を荒げた。それも必死そうな表情のオマケつき。

雄二「確か、久保……利光だったか？」

拓斗「やつぱりか」

久保利光 性別（／オス） 現在Aクラス所属

雄二「おい明久、ためざめと泣くな」

拓斗「よりにもよって男に恋愛感情持たれてるかも知れないなんて、普通はこうなると思うぞ？」

雄一「……まあ、確かにな」

パンパン！

福原「はいはい。その人たち、静かに」

バキイツ！ パラパラパラ……

福原「してください……ね？」

本人としては、軽くたたいたつもりだろう。

だが、壊してしまった事は事実の為、少々気まずそうな態度に。

福原「え。代えを持つきますので、皆さんは自習をしていくださいね」

拓斗「どんだけ酷い設備なんだよー！」

福原「これがFクラスです」

福原教諭の台詞に、何度も改めて設備のひどさを理解せしられる面々だった。

明久「うん……ねえ雄一、ちょっと良いい？」

雄一「あ？」

明久は雄二を伴い、廊下へ。姫路が怪訝そうな顔をして見送り、俺に問いかけた。

姫路「吉井君と坂本君、どうしたんでしょうか?」

拓斗「何だ、明久が気になるのか?」

姫路「え? いつ、いえ、そういうわけでは……」

拓斗「ふーん、じゃあそういうことにしようとくよ。」

俺は2人が出て行った廊下をちらりと見て、すくっと立ちあがる。秀吉は俺を見て。

秀吉「なんじや、またお主ら3人で悪だくみかの?」

拓斗「さあな、どうだろ? でも面白い事になりそうだな」

秀吉「やれやれ……まあお主ららしいの?」

拓斗「だけど嫌いじゃないだろ」

秀吉「飽きはしないの?」

互いに笑いあって、俺は1人気取られない様廊下へ。そしてゆっくりと建て付けの悪い扉を開いて……

雄二「つまり、姫路の為だろ?」

明久「そうだね、姫路さんには酷い環境だから、

改善してあげたいって気持ちはあるし心配なんだ」「

雄一「優しい所は相変わらずだな」

拓斗「それが明久だろ。で、何面白そうな事話してるんだ?」

俺は立ち聞きをやめ、会話を加わる。

明久「拓斗！」

拓斗「俺にも一枚かませろよ。そんな面白そうな話、俺が乗らない訳ないだろ？」

それに明久の頼みなら断る理由がないからな

明久はそれを聞いて感激し、雄一も不敵な笑みを浮かべた。

拓斗「で、雄一はなんで戦うんだ?」

雄一「世の中学力こそがすべてじゃないって事、その証明がしてみたくてな。

つてか拓斗も物好きだな……つと、先生が来た。入るぞ」

拓斗「それじゃFクラス代表のお手並み、拝見と行こうか?」「

雄一「ああ、任せておけ」

俺と明久は、雄一に向けてグッと親指を立てた。

雄一もそれに倣い、同様に親指を立てる。

拓斗「それより明久、試合戦争を提案したからにはお前も頑張れよ

？」

明久「もちろんだよ」

翔一「ちゃんと勉強位教えてやるよ」

明久「お願ひするね拓斗」

雄二「改めて言うが、お前も物好きだな。明久に勉強を教えるなん
て」

拓斗「まあ『くくらいなんともないな。

それに明久には食事面で世話になつてるからな』

雄二「そつか」

そして俺達が教室の中に戻つた。

プロローグ～雄一の宣言～

俺達は話し合いを終え教室に入ると
担任の先生が戻ってきて再び自己紹介が始まった。

須川「須川亮です。えー、趣味は……」

そんな風に自己紹介が続き、最後に福原先生が坂本に声を掛けた。

福原「最後にFクラス代表の坂本君。君の自己紹介をして下さい」

雄一「了解」

答えて雄一は立ち上がり、ゆっくりと前に出た。
その雰囲気に、Fクラス中の視線が集まる。

雄一「Fクラス代表の坂本雄一だ。俺のことは、
ま、坂本でも代表でも好きに呼んでくれ」

そこで、あいつは少し……間を空けた。どうやら始まるか…

雄一「さて……みんなにひとつ聞きたい」

言いながら皆と視線を合わせる。

そして、流れるように教室各所に視線を移していくと、
みんなの視線も自然とそれを追っていた。

雄一「カビ臭く、すき間風が通る教室。古く、うす汚れて綿もスカ
ス力な座布団。

汚れた上に、脚もガタガタな卓袱台

「

そして再びみんなを見てから口を開いた。

雄一「そしてAクラスは冷暖房完備の上、
座席はリクライニングシートらしいが……」

ひと呼吸置くと、確認するように告げる。

雄一「不満はないか?」

F『『『『大アリじやあつ……』』』』

不満大爆発だ。

雄一「だろう? 僕だって不満だ。このクラスの代表として大いに問題意識を抱いている」

雄一は頷きながら同意する。

すると、あちらこちらから不満の声があがり始めた。

F『『くら学費が安いからって、この設備はあんまりだ! 改善を要求するー。』』

F『そもそもAクラスだっておなじ学費のはずだ! あまりにも差が大きすぎるー。』

F『『そうだそうだー。』』

引き継ぐべつに雄一は口を開いた。

雄一「みんなの意見はもつともだ。そこで、これは俺の代表としての提案なんだが」

雄一は一呼吸おくと

雄一「Fクラスは、Aクラスに対し『試験召喚戦争』を仕掛けようと思つ」

雄一は戦争の引き金を引いた

俺はそれをふつと笑い

拓斗「面白くなりそうだ」と呟いた。

キャラ 紹介1（前書き）

今作品ではこちらの勝手な都合でキャラクターの自己PRを変えたり付け加えたりしています。なるべくは原作に沿うようにしたいと思っています。

ひとまず

バカテスキキャラから明久・雄二・秀吉・康太の4人を、ISからは一夏、筈の2名を紹介します。

キャラ 紹介1

「バカテス」

吉井 明久
よしい あきひさ

- 誕生日：3月6日 O型

- 外見は本人曰く「365度」どこから見ても美少年。
身長は175cm

- 学園創設以来初めての「バカ」の代名詞である「観察処分者」
- 自己保身の為にはかなり悪知恵が働き不意打ちなどの卑怯な手段も躊躇わないが、良くも悪くもバカ正直で他人のために真剣に怒れるまつすぐな心根の持ち主
- 文月学園には試験校の為学費が安いことから入学した。
- 料理はそこらの家庭料理では相手にならないほどの腕前。
得意料理はパエリア
- 得意科目は日本史、成績は拓斗のおかげでDクラス程度の学力を持つ。

- 拓斗とは小学校からの親友
- 拓斗のおかげでそこまでひもじい生活はしていない。

召喚獣

- 服装：改造学ラン
- 武器：ガンダム00のエクシアのGNソード
刀身を折り畳むことでライフルモードに変形する。
- 腕輪：???

- 拓斗のおかげで少し点数が上がっていて日本史だけはAクラスにあるので
- 武器が強くなっている。

坂本 雄二
さかもと ゆうじ

・Fクラス代表

・誕生日 8月7日 A型

・187cmの長身と精悍な顔立ちを持つ不良少年

・幼少時代には「神童」の異名をとり、現在学年首席の地位を誇る翔子よりも

高い学力を持つていたが、中学生時代に勉強を全くせず体を鍛えていたため

現在はその面影は微塵にも感じられない。

中学生時代は喧嘩で鳴らしていたため今も尚「悪鬼羅刹」の名で

他校の不良達に恐れられている。

召喚獣

- ・服装：改造学ラン
- ・武器：ガントレット
- ・腕輪：？？？

Fクラスの代表なのでさすがにメリケンサックでは弱すぎる

ので

ガントレットに変えてみましたました。

木下 秀吉
きのした ひでよし

・誕生日 10月25日 B型

・身長 160cm

・演劇部に所属

・特技は声帯模写で女声も男声も自由自在。

・一人称は「わし」で、語尾に「?じゃ」をつけるなど古風な

言い方が特徴

・可憐な外見に似合わずジャガイモの芽を食べても平氣な

「鉄の胃袋」を持っている（自称）

織村 おりむら

一夏 いちか

(一夏)

召喚獣

- ・服装：袴
- ・武器：薙刀
- ・腕輪：？？？

土屋 つちや
康太 こうた

- ・誕生日 2月 22日
- ・身長 163cm、体重 48kg、AB型
- ・「ムツツリー」（寡黙なる性識者）と呼ばれる。
- ・ほぼ全ての台詞の頭に「……」が付くほど寡黙な性格
- ・原作の明久と同等のバカだが性に関する知識だけは豊富かつ貪欲で、

しかし実際には妄想ですら致死レベルの鼻血を噴くほどウブ
料理や裁縫などが得意で「紳士の嗜み」だが全ては下心の副
産物

- ・現代に蘇った忍者と称される「情報屋」で諜報（盗撮 & am
p; 盗聴等）・
- ・探索・暗殺・ピッキング技術に優れ裏方のエキスパート
- ・得意科目は保健体育

召喚獣

- ・服装：忍装束
- ・武器：小太刀二刀流
- ・腕輪：加速

- ・誕生日：9月27日
- ・身長は172cm
- ・クラス：『F』
- ・物心つく前に両親に捨てられ、その後は姉の千冬と暮らしていた。

高校受験の際、千冬に養つてもらつてることを引け目に感じ、じ、

- ・学費が安い文用学園に入学した。
- ・常に外で働いていた千冬に代わつて家事全般をこなしてきたため

そのスキルは高く、マッサージも得意。

- ・飄々とした性格ながらも自分の信念は貫く熱い一面を持つ。
- ・また、女性に媚びるような真似はしない。
- ・幼い頃から千冬に守られてきたことから「誰かを守ること」に強い憧れを持つ。

・整つた容姿に加え人の心の機微に鋭く、境界線の無い優しさと天然で女性をときめかせる言動や行動を見せる事から学園の内外を

問わず数多くの女子に好意を寄せられている。

しかし恋愛に対してもだけは呆れるほどに鈍感なため、

学園生徒達からは「唐変木・オブ・唐変木ズ」と陰で呼ばれている。

- ・振り分け試験日に道端で困つてている老人を助けて遅刻したためFクラスへ

- ・成績はCクラス程度。得意科目は現代国語。

召喚獣

見た目は『白式^{ゆきぶつ}』を装着した召喚獣。

- 武器
- ・雪片式型

刀剣の形をした、近接戦闘用の主力武装。

腕輪
『零落白夜』

- ・対象の点数を全てを消滅させる。

使用の際は雪片式型が変形し、エネルギーの刃を形成する。

相手の点数攻撃や腕輪による攻撃を無効化したり最大の攻撃能力。

自身の点数を消費して稼動するため、
使用するほど自身も危機に陥ってしまう諸刃の剣でもある。

篠ノ之 築
『ののしまき』

- ・誕生日：7月7日
- ・身長は160？
- ・クラス『F』

- ・長い黒髪でポニーtailの髪型をしている。
年齢不相応に大きい胸を気にしている。
- ・長年の剣道で培つた体からは長身の印象を受ける。
- ・実家は剣術道場でもある篠ノ之神社。
- そのため幼い頃から剣道をたしなんでおり、
実力はかなりのもので中学3年生の時に剣道の全国大会で優勝したほど。

一夏とは剣術道場の同門で小学校では1年生の時からずっと同じ学級だった。

一夏と知り合つた頃は馬が合わず、たびたび衝突していたが、
小学2年生の時、同級生の男子児童らのいじめから庇つてくれたことを

きっかけに名前で呼び合つ仲になり、その後は剣道を通じて打ち解けていった。

・成績はCクラス程度。得意科目は現代国語。

召喚獣

見た目は『紅椿』を装着した召喚獣。

武器

・雨月、空裂

刀剣の形をした主力武装。

雨月は刺突攻撃の際にレーザーを放出し、

空裂は斬撃そのものをエネルギー刃として放出する

ことが出来るため、

一対多における中距離戦闘にも適している。

腕輪
『絢爛舞踏』

・点数增幅能力となっている。

使用時には装甲から放出される黄金色の粒子によって

召喚獣の体が金色に輝き、少ない点数を増幅して

一気に召喚した時の状態の点数に回復したりできる。

他のIISへの点数提供を機体接触するだけで即時実行

出来る。

ただし、これは操作者が友人だと思っているものにしか発動しない。

また回数も7回までしか発動できない。

プロローグ ～試験召喚戦争～

雄一「Fクラスは、Aクラスに対し『試験召喚戦争』を仕掛けようと思つ」

F「そんなの勝てるわけがないだろ?」

F「これ以上設備が落ちたらどうなるんだ」

F「姫路さんがいたら何もいらない」

雄一がそういうとFクラスから否定的な声があがる。
何か関係ないものもあつたが・・・

雄一「そんな事はない、必ず勝てる。いや俺が勝たせて見せる」

F「無理に決まつてるじゃん」

F「そう言われても何の根拠もないしなあ・・・」

雄一「根拠ならあるや。このクラスには勝つ」とのできる要素が揃つてゐる

雄一は自信ありげにそつ宣言した

雄一「それを今から証明してやる!」

おい康太、いつまで姫路のスカートを覗いているんだ

康太「・・・・」

そういうと康太は素早く立ち上がり首を横に振った。

姫路「えつ」

姫路さんは顔を赤く染めスカートを押さえた。

雄一「土屋康太 こいつがあの有名な寡黙なる性職者だ」^{（ウツリーニ）}

そういうと康太は首を横に振った

F「馬鹿な・・・奴がそつだというのか？」^{（ウツリーニ）}

F「見ろー！まだ証拠を隠そうとしているぞ・・・」

F「ああ、ムツツリの名に恥じない姿だ」

雄一「それに姫路の事は皆その実力をよく知っているはずだ」

姫路「え？ 私ですか？」

姫路は学年トップ10に入っているほどの実力がある。

雄一「ああ、ウチの主戦力だ期待している」

F「そうだー俺達には姫路さんがいるー！」

F「彼女ならAクラスにも引けをとらない！」

雄一「それに木下秀吉だつている

秀吉「ワシもか？」

F「演劇部のホープ！」

F「確かにAクラスに木下優子っていう姉がいただろ」

雄一「そのほかにも島田もいる」

島田「えつウチ？」

火燐「わ、私もですか？」

雄一「島田は数学だけならBクラスにも匹敵するだけの実力がある

F「そうなのか」

雄一「織村一夏や篠ノ之箒もいる。

コイツラも成績はBクラス・Cクラス並だ

一夏「え？俺を知っているのか」

雄一「ああ、一応クラス代表なんでな。2人のことは調べた。
それにし織村も篠ノ之の2人は剣道をしているからな。
ある程度の動きはいいはずだ」

一夏「まあ期待に答えられるよう頑張るぞ」

箒「まあ頑張るとしよう」

雄一「それに風間拓斗いる。皆も聞いたことがあるはずだ
『文月の最強最悪の死神』を。コイツがその死神だ！」

F「なんだとーー？」

F「『死神』だとーー？」

確かにヤツに目をつけられた人間は無事ですまないといつ

F「あの死神が同じクラスにーー？」

いや、ただ俺は明久がバカにされたからボコボコにしただけなんだ
がな

雄一「それが今は俺達の味方だ」

F「おお、そうだな」

F「怖いものなんて無いな」

雄一「それに知ってるヤツもいるかも知れないが拓斗は
1年の頃は学年次席の学力を誇っている

F「マジでかーー？」

雄一「当然俺も全力を尽くす」

F「坂本って小学校の頃『神童』とか呼ばれてたんだろ」

F「確かになんかやれそうな気がしてきたぞ」

F 「「」れはいけんんじゃないか！？」

F 「よし…やつてやないじやねーか！…」
「…」

今教室の士気が高まつていつたが

雄一「それに吉井明久だつている」

といつとシーンと教室内は静まりかえつた。

F 「誰だよその吉井明久つて」

F 「それ以前にそんな奴らこのクラスにいたか？」

明久「雄一！何でそこで僕のの名前をだした！？
せつかく上がった士氣が台無しだよね…！」

明久が文句を言ひつと、雄一が睨み付けてきた。

雄一「そうか、知らないのなら教えてやる。

こいつの肩書きは『観察処分者』だ…！」

プロローグ　～観察処分者～

雄一「こいつの肩書きは『観察処分者』だ！！」

F「確かに観察処分者って『馬鹿の代名詞』じゃなかつたっけ？」

明久「ちつ違うよ！－！ちょっとお茶目な16歳の愛称で・・・」

雄一「そうだ『馬鹿の代名詞』だ」

明久「肯定するなバカ雄一！」

拓斗「あ、そうだ雄一。俺は今日付けで観察処分者になつたから口！」

雄一「なに！？タクトもか？」

拓斗「ああ、試験の時に軽く教師を殴つたら病院送りになつてな。今日、鉄人から言われた」

雄一「お前は試験日に何をやつているんだ・・・・・・・・まあいい」

拓斗「テヘッ つい」

雄一「気持ち悪いからやめろ・・・・・・・・まあいい」

第「それで、観察処分者とはどついつものなんだ？」

雄一「観察処分者っていうのは具体的には教師の雑用係だな。

力仕事とかの雑用を特例として物に触れるようになつた召喚獸でこなすんだ」

姫路「それって凄いですね！試験召喚獸つて見た目と違つて力持ちらしいですし」

明久「あはは。そんな大したものじゃないよ。

確かに僕なんかの点数でも召喚獸の力はかなり強いけど、その時受ける召喚獸の負担の何割かは僕にファードバックされるんだ。

F「皆と同じで教師の監視かでしか呼び出せないし僕にメリットもないしね」

F「おいおい・・・それならおいそれと召喚できないヤツがいるってだろ？」

F「だよな・・・それならおいそれと召喚できないヤツがいるって事じやん」

F「役立たずが1人いるってことだろ」

雄二「勘違いするな！確かに明久はバカだが

観察処分者の利点を有効に活用できるんだ」

一夏「利点？」

雄二「ああ。他のヤツらと違い明久は召喚する回数が多いせいが、

召喚獸の操作がおそらく学年トップを誇るだろう。

それに明久は日本史だけはAクラス並の成績を誇る。つまり明久は俺達の最高の戦力になるという事だ！」

一夏「なるほど……それは凄いな」

雄一の説明に納得するFクラスメンバー

雄一「だから明久はまわりのヤツラから見たらただの役立たず看見えるが

実は俺達の切り札にもなるわけだ！！」

F「それって凄いな」

拓斗「ゆ、雄一があ、明久のことをフォ、フォローしただと……

秀吉「本当じゃのう。いつもなら率先して明久のこと蹴落とすといふのに……」

一夏「そこまで驚く」となのか？」

拓斗「あの雄一だぞ！明久の不幸が自分の幸せとまで言つて居るアイツが

明久をフォローしたんだ！これは異常事態だ……

篠「そ、そこまで……」

雄一「とにかくだ！俺達の力の証明としてまずロクラスを制圧しようと思つ。

皆この境遇に大いに不満だるうへ。

F「……当然だ……」

雄二「なら全員筆を執れ！！出陣の準備だ！」

F 「 」 「 」 「 」 「 おお————ツ————！」 「 」 「 」

雄二「俺達に必要なのは卓袱台ではない！Aクラスのシステムデスクだ！！」

F 「 」 「 」 「 」 「 」 「 おお————ツ————！」 「 」 「 」

姫路「おッお——／＼／＼

姫路も恥ずかしげに掛け声をあげた。

雄二「まずは今日、何人かもう一度試験を受けてもらひ

明久「どういふこと？」

雄二「簡単な事だ。現時点での明久と拓斗、織村と篠ノ之は今の点数が低いはずだからな。今から試験を受けて点数を回復してもらう。

それに俺もFクラス代表になるため少し点数をセーブしたからな

拓斗「そういうことか

雄二「ということで俺達5人が回復試験を受けるわけだが

皆は他のクラスに俺達が試験戦争を始めようとしていることを知られないために、自由にしておいてくれ。

今日は始業式だからな早めに帰っても良いだろ？

ただ姫路だけはすぐに帰ってくれ。

おまえの存在を他のクラスに知られたくないからな。

お前は俺達の秘密兵器だからな

姫路「わかりました」

その後HRも終わり解散となり、俺達5人は回復試験を受けた。

その後、俺達は一夏と篠と仲良くなり名前で呼び合うことになった。

そして俺たちの戦いの幕が開こうとしていた。

Dクラス戦～開戦前～

翌日

雄二「明久には、Dクラスへの宣戦布告の為の死者になつて貰う。

無事大役を果たせ！」

明久「イヤだ！それに下位勢力の宣戦布告の使者つて、

大抵酷い目に遭うよね？しかも今、字が違わなかつた？」

雄二「チツ。明久のクセに気づいたか」

拓斗「さすがに明久でもそれぐらいわかるさ。

でもな雄二。明久は大事な戦力だぞ。使者なんて任せらるなよ」

雄二「ああ、そうだつたな。ついいつものクセで」

明久「ちょっと…それどういうこと」

結局宣戦布告の使者は須川に任せた。

そのしばらくの後、須川がボロボロの状態で教室に転がり込んだ。

Dクラスに掴みかかられ、ぼろぼろになつた姿を見た雄二は一言。

雄二「やはりそう来たか」

それはそうだろうな。

それで須川が騒いでいたが軽く流した。

雄二「さて、今からミーティング行つぞ?」

と言つ雄二の言葉に従い、主要メンバーは屋上へ。

一夏「俺たちもいいか?」

拓斗「もちろんだ」

そして、皆で屋上に。

雄二「で、須川がちゃんと開戦時間を伝えたらしいからな」

明久「だから先にお昼ご飯だね?」

雄二「今日も弁当か明久」

明久「うんそうだよ。はい拓斗」

拓斗「いつも悪いな」

俺たちは明久から弁当を受け取る。

パクパクパクパク

明久「落ちついて食べてよ

拓斗「おーしそうでつい」

姫路「あれ、そのお弁当つて？」

拓斗「明久が作ってくれたんだ」

雄二「明久の料理は美味しいからな」

島田「え？ 吉井が弁当作ったの？」

明久「そうだよ」

一夏「凄いな明久は」

姫路「う、嘘です。吉井君が料理できるなんて信じられません」

島田「そつよ。本当は誰が作ったのよー」

拓斗「いや、その弁当は本当に明久が作ったんだぞ」

雄二「明久の料理は上手いから。俺もまだ勉強しないとな」

秀吉「明久の料理は美味しいからの」

康太「…………また食べたい」

姫・島「信じられません（信じられない）」

篠「そこまでの腕なのか？」

一夏「ちょっと気になるな」

拓斗「なら少しだけわけてやるよ。少しだけだからな」

俺はそういうと卵焼きを一切れずつ一夏と筈に分けてあげた。

一夏「こ、これは美味しいな」

筈「うん、これは店に出せる味だぞ」

明久「そ、そうかな／＼／＼／＼」

拓斗「だろ。美味しいだろ」

一夏「そういうえばなんで明久はタクトに弁当作つてきてるんだ?」

明久「それはね勉強とかでよくタクトに世話になつてるから、
そのお返しかな」

雄二「さて話を戻すぞ。試合戦争についてだ」

秀吉「雄二よ。1つ気になつたんじゃが
どうしてAでもEでもなくロクラスなんじゃ?」

雄二「色々理由はあるんだがEクラスは相手じゃないからだ。
明久見てみる。ここにいるメンバーを」

雄二が明久に集まつたメンバーを見ると言い、
明久は全員の顔を見回し言つと、

明久「えーと、美少女が3人、バカが2人にムツツリが1人と
親友が1人、ノーマルが1人いるね」

雄二「誰が美少女だと！？」

明久「どうして、雄二が美少女に反応するのー？」「

康太「…………（ポツ）」

一夏「俺はなんだ？ やつぱりバカの分類か？」

明久「ムツツリーに一夏まで！？ どうしよう！？
僕だけじゃツツ「ミ切れないよー！？」

美少女に雄二と康太が反応して明久は声を上げる。

秀吉「まあまあ皆落ち着くのじや」

拓斗「そうだぞ。一度落ち着け」

俺と秀吉で明久たちを落ち着かせる。

明久曰く

美少女 姫路・秀吉・筈

バカ 雄二・島田

ムツツリ 康太

親友 拓斗

ノーマル 一夏

雄二「ま、要するにだ」

「ホンと咳払いして雄二が説明を再開する。

雄二「拓斗や姫路に問題のない今、正面からやりあつてもEクラスには余裕で勝てる。Aクラスが目標である以上、Eクラスなんかと戦つても意味がないってことだ」

明久「？ それならDクラスとは正面からぶつかると厳しいの？」

雄二「ああ。確実に勝てるとは言えないな」

明久「だつたら、最初から目標のAクラスに挑もうよ」

雄二「初陣だからな。派手にやつて今後の景気づけにしたいだろ？ それに、さつき言いかけた打倒Aクラスの作戦における必要なプロセスだしな」

姫路「あ、あの～」

雄二「ん？ どうした姫路」

姫路「えつと、その、さつき言いかけたつて……吉井君と坂本君は、

前から試合戦争について話し合つてたんですか？」

雄二「ああ、それか。それはついさつき明久が」

明久「それはそうと！ さつきの話、

Dクラスに勝てなかつたら意味がないよ」

雄二「負けるわけないさ」

明久を笑い飛ばす雄二

雄一「お前らが俺に協力してくれるなら勝てる
…………いいか、お前ら。ウチのクラスは 最強だ」

島田「良いわね。 面白いわうじやない！」

拓斗「暴れちゃうぜ」

一夏「頑張るぜ」

篠「まあ頑張るとしよう」

秀吉「Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

康太「…………（グッ）」

姫路「が、頑張りますつ」

雄一「そうか。 それじゃ、作戦を説明しよう」

そして、俺達は勝利のため雄一の作戦に耳を傾けた。

Dクラス戦～開幕～

雄一「皆、これからはDクラスと戦争を行つ。

昨日言つたように俺達には強力な仲間がいる」

F「そだー俺たちにはあの『死神』がいるんだ

F「それに姫路さんもいる

F「篠さん俺とつきあつてくれ

F「姫路さん俺と結婚しよう

今また何か幻聴が聞こえた気が・・・・・・

雄一「そこで戦争を効率的に行つため部隊を作つた

明久「部隊？」

雄一「ああ、前線部隊、中堅部隊、遊撃部隊、

情報部隊、近衛部隊の5つの部隊を作ろ」と思つて

拓斗「で雄一、もつ割り当ても考へてるんだろ」

雄一「ああ、今それを張り出す

そして雄一は紙に書かれた部隊表を黒板へと貼りつけた。

部隊長	織村一夏	補佐	篠ノ之筈
以下	10名	計	12名

< 中堅部隊 >

部隊長	吉井明久	補佐	木下秀吉
以下	10名	計	12名

< 遊撃部隊 >

部隊長	風間拓斗	補佐	なし
以下	11名	計	12名

< 情報部隊 >

部隊長	土屋康太	補佐	なし
以下	7名	計	8名

< 近衛部隊 >

部隊長	坂本雄二	補佐	姫路瑞希
(代表と兼任)			

以下	15名	計	17名
----	-----	---	-----

とかかれてあつた。

俺たちFクラスは他のクラスより11名ほど多い61名いる。理由は成績上位からクラスを分けているのでクラス毎に席の数が決まっている。

各クラス毎に50名なのでFクラスに残った者が送られるからである

「雄二」という風になつてゐる。俺からも指示を出すが

拓斗からも指示を出すようにしてゐるから拓斗の指示にも従

うよつこ

拓斗「なあ雄」。それ俺の負担でかくないか?「

雄一「氣のせいだ」

拓斗「絶対氣のせいじゃない氣がするが・・・」

雄一「で、作戦だが、まずは一夏率いる前線部隊がDクラスと戦う。その後方に明久率いる中堅部隊が状況を見てから援護しろ。

拓斗率いる遊撃部隊は、中堅部隊がピンチな時か、攻勢のときに出でくれ。

拓斗の判断に任せることにする。

拓斗「了解」

雄二「では皆頑張つて欲しい！」

開戦時間になり、

Fクラス対Dクラスの試召戦争の火蓋は切つて落とされた。

廊下

一夏が叫び、
突撃する。

篇「皆突っ込むんだ！」

一 夏が敵の先手とぶつかる。

Fクラス
化学
織村一夏
VS
Dクラス男1
153点
135点

一夏は武器である雪片式型を上手く使い敵を倒す。一夏は明久と比べると召喚獣の操作は上手くないが普通の生徒と比べると上手いほうだ。

それに点数差もあるせいか一瞬で倒す事ができた。

——夏——一番手柄、Fクラス、織村——夏がもらったぞ！！！

F 「俺達も続けえ！！」

D 「なんでFクラスにあんな点数のヤツがいるんだ！？」

敵がひるんだ所にFクラスの面々が突っ込んでいく。

D 「クソッ！Fクラス相手にやられてたまるか！」

D 「塚本どうするんだ？」

塙本「焦るな。俺達のほうが点数も數も上だ！」

困んでつぶすんだ！！

今、前線部隊は12名それに対しDクラスは30名近くいる。

12対30の戦いが始まっていた。

・・・・・・・・・・・・

F 「うわあ、駄目だー、やられるー。」

戦闘開始後やはり数と点数差でFクラスが押されてくる。

F 「！」までなのか

F 「やられるとー。」

篠「大丈夫か？ 皆、あきらめるな！ 最後まで戦うんだ！」

仲間がやられる直前、篠が割って入って助け出す。

一夏「篠の言つとおりだ！」

そして一夏が敵を切り裂いた。

F 「姐さんありがとうございます。俺最後まで頑張ります！」

F 「俺達も姐さんに續くんだー！」

「アーティスト...」

篠が仲間を助けた事で指揮が上がった。

筈「あ、姐さん・・・・・」

一夏一良かつたじやないか筈。
あだ名がついて」

第「う、うるさい！私達もいくぞ一夏！」

Dクラス戦 ～暴走少女登場！！～

（明久Side）

島田「吉井！渡り廊下で織村達が戦闘状態になつたわよ！」

僕の役目は秀吉や島田さんや他に数人を率いる中堅部隊の隊長だ。

明久「分かつた！中堅部隊全員行くよー！」

《了解ツーー》

そして僕は秀吉や島田さんを含む12人を率いて戦場へと向かって行つた。

（明久Side End）

一夏「くそっ！次から次へとキリがない！！」

Dクラスの生徒は完全にFクラスを油断しきつていた。
自分達よりも2ランク下、

しかも最下位のFクラス相手だから大したことないと思つていた。

が、すでに30人程が展開していたDクラスの前衛部隊は、既に半分の15人になっていた。

といつてもFクラスのメンバーは一夏と篠を入れて5人しか残っていなかつた。しかし一夏と篠の2人によつて10名程倒されているのだが

篠「さすがにこのままではまずいな」

前線で味方を助けるため奮闘している篠だつたが、さすがに点数が減つてきていた。

D「これで終わりだ！」

篠「し、しまつた！？」

一夏「やらせるか！」

【教科・化学】

F組・織村一夏 69点

VS

D組・モブ 99点

D「しまつ ！？」

振り向いた時、相手の召喚獣は一夏の一撃をくらい、消滅した。

篠「すまない一夏」

一夏「気にするな。篠は俺の後ろに下がつて援護頼む」

篠「了解した」

鉄人「さあ戦死者は補習室に移動しろ！！」

そこへ現れたのは鉄人。

彼は逃げようとするDモブを捕まえ補習室まで担いで行つた。

一夏（何とか勝てたが正直もう召喚獣はヘロヘロだな）

明久「一夏、篠さん！大丈夫！？」

Dクラス前線部隊を相手に疲弊しているところに明久達の中堅部隊が合流してくれた。

一夏「明久！来てくれたんだな！」

明久「うん！もう大丈夫だよ。それより状況は！？」

一夏「もう俺達しか残っていない。

それに点数もだが召喚獣も疲弊しきてる」

篠「すまない。敵の前線部隊の半分は倒したのだが・・・・・・

明久「わかった。これより中堅部隊が援護するよ！だから前線部隊は下がつて点数を回復してきて

さあ皆、僕に続けえ！！」

F『了解つーー。』

とつあえず指示を出し終わったあと、僕達は戦線へと向かった。

そこで僕たちは数人倒すと

美春「ようやく見つけましたーお姉さまー。」

島田「げつ！ 美春」

明久「何？島田さん。知り合い」

清水「……お姉さまに捨てられて幾日、美春は、
美春はこの瞬間を待ち続けていましたー。」

島田「もういい加減うちのことは諦めなさい！」

その言葉とともに、美波の召喚獣が打ち掛かる。

清水「イヤですー。お姉さまは、いつまでも……いつまでも、
美春のお姉さまなんですー。」

繰り出された一撃を、美春の召喚獣が受け止める。

島田「来ないで！ ウチは普通に男が好きなの！」

清水「嘘です！ お姉さまは美春のことを愛しているはずですよー。」
どいつも見ても島田さんは嫌がつているはずなのだが、
清水さんにはそう見えないらしい。

島田「て、やあ」

清水「負けません！」

何回かの打ち合いがあつたが、
その全てで美波の召喚獣は打ち負ける。

明久「島田さん！ 点数が上の相手に、正面から打ち合っちゃダメだ
！」

島田「そんな、こと、言われても、細かい、
動作は、できない、のよ、きやつ！？」

力負けした美波の召喚獣が武器を弾かる。

清水「ここまでですっ！」

そのまま倒れた美波の召喚獣に、美春の召喚獣が剣を突きつけた。
2人の召喚獣の頭上に94と53が表示されている。
当然、清水さんが94で島田さんが53だ。

清水「さ、お姉さま、勝負はつきました」

島田「ほ、補習室は嫌あつ！」

清水「補習室？……フフッ。

そんな無粋な場所へお姉さまを送り込んだりしませんわ。
さあ、参りましょう

そつ言つと、清水さんは島田さんの手を取つた。

島田「な、なにを……」

清水「この時間ならベッドも空いてますわ」

島田「い、いやよ。よ、吉井。助けて」

……仕方ないな。ここで戦力が減るのもイヤだし

清水「邪魔者は殺します！」

明久「はっ！」

僕は清水さんの攻撃を軽くかわし木刀をのぞに突き刺した

清水「そ、そんな……」

召喚獣を一撃で倒された清水さんは、呆然と立ち尽くした。

島田「補習の西村先生、早くこの危険人物を補習室へお願ひします
！」

鉄人「おお、清水か。たっぷりと勉強漬けにしてやるぞ。じつひん

来い

清水「お、お姉さま！美春は諦めませんから！」

「のまま無事に卒業出来るなんて思わないでくださいね！」

最後に恐ろしい言葉を残して連れ去られていった。

明久「……秀吉は負傷した島田さんをつれて下がつてもらひて良いかな。

「」は僕達が受け持つから

秀吉「了解じゃ

先ほどの清水さんの攻撃により島田さんの点数はかなり下がつての秀吉を護衛に下がつて貰つた。

さて、ここから頑張らないとな。

Dクラス戦 ～暴走少女登場！～（後書き）

Dクラス戦 明久率いる中堅部隊登場です。

皆さんの感想お待ちしています！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5267y/>

バカとISとガンナーと召喚獣

2011年12月16日19時54分発行